

國學院大學學術情報リポジトリ

「共育」における学生の学びの実態と課題：
地域と連携した学びの共同体づくりに向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001250

「共育」における学生の学びの実態と課題

～地域と連携した学びの共同体づくりに向けて～

小笠原 優子

The Reality and the Problems of the Students in “Collaborating-Education” Course of Kokugakuin University; Towards Building a Learning Community of University and Society Collaboration

Ogasawara Yuko

キーワード：共育、社会体験的な実習、地域連携、教育インターンシップ、子ども理解

1. はじめに

人間開発学部設置されている「教育実践総合センター」の役割¹⁾は、社会体験的な演習・実習等を通じた大学と地域社会の連携による「共育」の実践を行い、地域に育てられ地域と共に育つ人材の育成（人間開発学部の目的（3））することである。

これまでに、教育実践総合センターでは、教育インターンシップなどの教科科目の支援を行ったり、学内外の関係機関との連携のもとに教育に関する理論的・実践的研究および指導に関わったりしてきた。

平成22年度から始まった教育実践総合センターの取り組みや教育インターンシップの授業開講は今年で3年目を終了した。今年度、人間開発学部一期生は教員採用試験に臨み、地域との連携についても、4年間の取り組みの締めくくりの年となった。3年間の教育実践総合センターの取り組みを通して見えてきたものから、「共育」における学生の学びの実態と課題について述べていきたい。

具体的には、まず、教育インターンシップ3年間の実施状況と学生の学び・成長について、学生の活動とその振り返りの感想とを関わらせて述べたい。次に、人間開発学部教育実践総合センター主催の夏季教育講座、教育ボランティア等、地域教育関係機関との連携の視点から述べ、地域と連携した学びの共同体づくりに向け、見えてきた「共育」における学生の学びの実態と課題を探っていききたい。

2. 人間開発学部における教育インターンシップ3年間の実施状況

本学では、教育インターンシップの授業のテーマを「地域諸学校との連携による実践体験型実習

2)』としている。

また、「教育インターンシップは、教育実習に向け、学校教育の実際を学ぶ機会として実践体験型授業科目である。「学校等に身を置くことで、教育に対する実践的理解を図り、教職へ向けた学びの展望を得る。」とし、教育インターンシップの主な目的は、「①子どもたちとの交流を通して体験的な「子ども理解」を促進すること。②教育現場の日常的業務や教育の仕事についての理解を深めること。」としている。

教育インターンシップ実施前の平成21年度に、近隣校（横浜市立新石川小学校、鴨志田第一小学校、元石川小学校、山内小学校、山内中学校）と大学による教育ネットワーク会議を立ち上げ、学生の教育ボランティアの活動が始まった。教育ネットワーク会議校から、学生の活動についての意見をいただきながらの準備期間となった。

2-1 教育インターンシップにかかわる学生の人数の変化

平成22年度から教育インターンシップの授業を開講した。それにかかわる学生の人数は下の表の通りである。

年 度	初等教育学科	健康体育学科	計
平成22年度	79名	8名	87名
平成23年度	66名	14名	80名
平成24年度	74名	12名	86名

教育インターンシップにかかわる学生数は、毎年80名を超えている。初等教育学科の学生に比べ健康体育学科の学生数が少なくなっている。教育実習を行う予定が初等教育学科3年次、健康体育学科4年次となっているため、上記の数字に影響していると思われる。

また、健康体育学科の学生については、教職を目指す進路決定後に動き出すことが多く、2年次で行う学生と3年次で行う学生が同数程度となっている。平成24年度も、後期になって、教育ボランティアを行いたいという相談がセンターに入ってきている。

平成23年度からは、教育インターンシップからの継続で教育ボランティアを行う学生、または、あらたに学校での教育ボランティアを希望する学生が見られるようになった。

平成22年度の人数が最も多くなっているが、途中段階で活動が打ち切りになる学生が見られた。この年は初年度のため、学生の意識付けや体制づくりについて課題を残した。

年度を経るに従い、学生一人の平均活動時間の増加、教育インターンシップ終了後の活動の継続の増加が見られる。教育インターンシップが選択制の授業であることから、教職をめざす意識をもって履修するという学生の姿勢が強まったと考えられる。

2-2 教育インターンシップ受け入れ校・園の広がり

年度		横浜		川崎		神奈川								東京	埼玉	栃木	千葉	静岡	山梨	計	
		青葉区	その他	宮前区	その他	厚木	綾瀬	伊勢原	海老名	鎌倉	相模原	茅ヶ崎	平塚								藤沢
22	小学校	22	4	3						2	2			1	7	4	2				47
	中学校	6	1						1						2		1				11
	高等学校														1	1					2
	幼稚園	3													1		1				5
23	小学校	20	10	7	1	1	1	1		1		1	1		8	5		5	1		63
	中学校	8			1										1						10
	高等学校																1				1
	幼稚園	3													1						4
24	小学校	22	11	12		1			1	2	2				12	1		3		1	58
	中学校	4		4	1												1				10
	高等学校	1	1																	1	3
	幼稚園	3																			3

上の表は、受け入れ校数を示したものである。受け入れ校・園は、平成22年度60校5園、23年度74校4園、24年度81校3園となっている。どの年も近隣校の受け入れが多くなっているが、これは出身校が遠隔地で活動を行うことのできない学生の受け入れを、特に近隣の横浜市青葉区と川崎市宮前区にお願いしているためである。平成22年度は、特に各校複数配置になっているため、70%以上の学生が青葉区で活動したことになる。

平成23年以降は、出身校で活動する学生数が増加し教育インターンシップから継続した教育ボランティア活動、教育実習とつなげていくケースが増えている。

2-3 教育インターンシップ受け入れ校から学生の実習についての要望

受け入れ校からの要望については、「学習指導の補助（通常級または特別支援学級）」「水泳や部活動、クラブ活動等の指導補助」「学校行事（遠足、校外学習、運動会、新体力テストなど）での支援」「集団宿泊の行事（体験学習、修学旅行など）での支援」などが寄せられる。

各年度とも特別支援学級の児童生徒にかかわる支援や、不登校児童生徒にかかわる支援など、特別支援にかかわるものが多かった。

その他具体的な要望については、次のようになっている。

	具体的な要望
平成22年度	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの中で、集中できない児童への支援をしてほしい。 ・算数の少人数指導の中でかかわってほしい。 ・体育授業での準備や片付けなどを子どもと一緒にやってほしい。 ・学校の環境づくりにかかわってほしい。 ・休み時間に子どもたちと体を動かしてほしい。 ・給食時間や清掃時間を子どもたちとともに過ごしてほしい。 ・学校と地域がかかわる行事に参加してほしい。

平成 23 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級の支援をすることにより、特別支援教育を学ぶ機会としてほしい。 ・休み時間や給食時間に児童と交流することにより子どもの実態を知り、担任の仕事を身近に見ることにより将来の教師としての仕事への見通しと意欲を喚起したい。 ・休み時間や給食時間に児童と交流することにより子どもの実態を知り、担任の仕事を身近に見ることにより将来の教師としての仕事への見通しと意欲を喚起したい。 ・授業をはじめ、運動会や体験学習等学校行事などのサポートを通して、児童への適切なかわり方や指導の中で大切にしていくこと等について身につけて欲しい。 ・実習終了後も継続してかかわってほしい。 ・将来教員をめざす大学生を積極的に受け入れている。教育ボランティアを含め現場で頑張りたい学生を紹介してほしい。 ・実習を通して、多くのことを実践的に学んでもらえるよう連携を図って進めていきたい。
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・保育現場で子どもの遊びを経験しながら、子どもの理解や保育者の仕事の理解を深めてほしい。 ・児童との触れ合いを通して日々の様子、表情、言動から子どもの気持ちを把握できるよう児童理解を深めてほしい。 ・特別な配慮を要する児童に寄り添い児童の学習習慣定着のために効果的な支援の方法を学ぶ機会としてほしい。 ・生徒個々の障害や個性を知り、その特性に合わせた支援の方法について実践の中で学んでほしい。 ・小学校全ての学年・学級に入り、子どもたちと触れ合う中で発達段階の違いや一つの言葉でも一人ひとりの子どもの受け止め方の違いを認識して教師としての器の基礎を築いてほしい。 ・指導技術や言葉かけによって子どもたちの理解度や意欲に違いが出てくることを授業を参観することで体得してほしい。 ・学校行事を通して育まれていく子どもたちの成長を1年間見守ることで教師としての喜びが何かを学んでほしい。 ・体育大会や合唱コンクールなどの行事において、障害を持った生徒がそれぞれの特性に応じて出来る参加形態の多様さを知り実践の中で生かせるように学んでほしい。 ・クラブ活動、委員会活動に年間を通して関わり、児童の成長に関わる教師の仕事を理解してほしい。 ・18回の実習日だけでなく、運動会やチャレンジ学習等の行事にも出来るだけ参加し、子ども理解、教育現場の業務についても理解を深めるようにしてほしい。 ・全学年に在籍する特別支援学級に児童と年間を通してまんべんなく交流することで、子ども理解に努めて欲しい。子どもの心身の発達について教育現場での実践を通して理解を深め、支援の在り方を積極的に学んでいく姿を期待している。

平成22年度は、学校現場が実際に必要としている人的支援と直接結び付くような要望となっている。また、初めて教育現場に入る学生でも活動可能な水準の表現で要望が出されている。

平成23年度は、活動や体験を通して学生に身につけて欲しいことや学んでほしいことについて具体的に要望が出されている。

平成24年度は、子どもを育てる視点に立った表現が多く見られる。また、教育の仕事についての理解、教師の姿勢の在り方に関する学びについても触れられている。学校側の要望からも、よ

り教職を目指す学生の成長への期待がうかがえる。

これらの要望は、地域と連携した学びの共同体づくりの視点につながる。ここから、実際の学生の活動を通して受け入れ校との意見交換を行う場として、教育ネットワーク会議、教育インターンシップ連絡協議会の実施が大きくかかわってきているものとする。

教育ネットワーク会議、教育インターンシップ連絡協議会は以下のように開催した。

年 度	日 時	参 加 者	内 容
平成22年度 (ネットワーク会議)	10月14日	ネットワーク会議校担当者 人間開発学部教職員	◇実施状況について ◇各校の実施状況報告、意見交換 ◇今後の実施に向けて
平成23年度	6月16日	青葉区小中学校担当者 人間開発学部教職員	◇手続き、単位認定等について ◇実施状況について ◇各校の実施状況報告、意見交換 ◇今後の実施に向けて
	12月20日	受け入れ校担当者 人間開発学部教職員 人間開発学部学生	◇実施状況について ◇各校における活動報告（学生） ◇各校の実施状況報告（担当者） ◇意見交換 ◇今後の実施に向けて
平成24年度	7月13日	横浜市立小中学校担当者 川崎市立小中学校担当者 人間開発学部教職員	◇手続き、単位認定等について ◇実施状況について ◇各校の実施状況報告、意見交換 ◇今後の実施に向けて
	12月6日	受け入れ校・園担当者 人間開発学部教職員 人間開発学部学生	◇実施状況について ◇各校における活動報告（学生） ◇各校の実施状況報告（担当者） ◇意見交換 ◇今後の実施に向けて

※ネットワーク会議校・・・新石川小学校、鴨志田第一小学校、元石川小学校、山内小学校、山内中学校

教育インターンシップ連絡協議会の開催方法は、この3年間で変化してきている。参加者を、当初近隣受け入れ校担当者と人間開発学部教職員としていたが、23年度からは、第2回目は受け入れ校・園全ての担当者、本学学生、本学教職員を対象としてきている。

内容としては、平成22年度は、大学と受け入れ校担当者との意見交換を中心に行ったが、平成23年度以降は、1回目を近隣小中学校担当者との意見交換、2回目については学生の活動報告会も兼ねて行い、学生の活動報告と受け入れ校担当者からの状況報告も内容に加わっている。特に、学生報告会を兼ねることについては、受け入れ校からの意見をもとに改善を図り、学生と受け入れ校学校長や担当者との情報交換と交流の充実に効果を上げることができた。報告会を兼ねた連絡協議会では、担当者から学生の学校での活動の様子について具体的に報告や意見をいただき、学生の学びの場となっている。また、報告会ということで下学年の学生参加者もあり、学校現場

の話題や教師や学生の先輩の姿勢から刺激を受けている。

3. 学生の学び・成長の視点から

3-1 学生の「こえ」に見られる学び・成長

学生は、実際に教育インターンシップの活動を開始し、教育現場における子どもたちや先生方との出会いやかかわりから様々な経験をする。感じたことの報告・相談についてセンターに寄せられた代表的な「こえ」を、「子どもとのかかわり」「先生との関係」の視点で示したい。

子どもとのかかわり

A	「先生、創造性あるね。だって話が上手だもん。」と言われた。会ったばかりなのに、すぐ分かるのにはびっくり。子どもってすごい。
B	メモに自分の紹介を書いて渡してくれた男子がいてうれしかった。それから・・・この間目つきが怖いと思った女子は、よく話したら、おとなしくてかわいい子だった。
C	国語の教科書を、1回目は一緒に読むことができたが、「もう、やだ。だめ。」と言われた。
D	一人の子どもに、ずっとついていて、いつも同じ状況で自分は何をしてよいかわからなくて疲れてきちゃいました。
E	3年生が引退に向けて相談に来て、「後輩に感謝されるように引退したい。」と言われました。3年生は2年生よりレベルが上ではないので、思いが分かるんです。どうしようかなあ。

子どもとのかかわりで、A、Bは、子どもとの出会いの時点での印象を語っている。想像していたこととは異なる子どもたちの反応に驚いたり喜んだり、時には第一印象で子どもを判断してしまう様子が見られる。C、Dのように、子どもに一生懸命関わるが、学生が思うようには動いてくれない子どもの様子に悩むケースは、よく見られる相談事項となっている。困った時どうすべきか学生に判断を迫る場面になり、長いスタンスで子どもの変容を見ること、困ったことを一人で悩むのではなく先生方と相談し対応することなど、学生自身が気付いていくことができた。

先生との関係

A	(活動は)金曜日が望ましいと言われました。9月までは無理なので、授業を欠席した方がよいですか。
B	どうしよう。先生のスーツ貸してください。「きょう来てください。」とおっしゃっているのですが。
C	「この子を見ていて」と言われたが、一番前の席に座っていて、自分はどうみていいかわからなかったけど、しゃがんで隣でずっと見ていた。
D	体験学習。先生方は大変！担任の先生は「寝ていない。」っておっしゃっていました。
E	体験学習の集合7時半なので始発で行きます。夜の当番(不寝番)が4時からで早朝のハイキングも担当。大変そう！

A、Bは、学生が受け入れ校の校長先生から言われて困って言葉を口にした例である。「先生方の言われた通りにしなければいけない」という気持ちがあり悩んでいたが、2例とも、どう先生方に状況を説明すべきかを考え解決した。Cは、校長先生からの言葉に、「行動しなければ」と思いながらも体の動かなかった学生の例である。学生にとっての教室は子どもの頃いた教室と

は「別世界」とのことで、初めて教室に入るときに緊張する学生が多く見られた。D、Eは、教師の立場で経験する体験学習の例である。新しい発見が多くあり、特に先生方の動きに驚くようである。Eは先生からの言葉に対し、嬉しく思ったことを伝えてきた例で、大変だけれども期待されていることを感じ「頑張ろう」とする様子が見られた。

3-2 教育実践総合センターだより「思ひ草」に見られる学生の学び・成長

次に、「思ひ草」掲載の学生の文から学生の学び・成長の様子を見ていきたい。

運動会で踊るダンスで合格をもらう為に汗をかきながら一生懸命練習する子、宿泊体験でシーツをたためないお友達に手を貸してあげる優しい子、「私ね、昨日小びと見たの！」と目をキラキラさせながら話しかけてきてくれる子、思いどおりにならず口をとがらせながらいじける子……。 (中略) 私は小学校から帰ってくると、「なぜあの子はあの時にああいう発言をしたのだろう」「なぜあの子はああいう行動をとったのか？」と子どもの気になる発言や行動について自分なりに分析をすることが楽しみとなっています。子どもを理解しようとする気持ちがなければ適切な支援はできません。³⁾
(初等教育学科 北島 沙紀)

跳び箱の授業で、まだ一度も跳び箱を跳べない子がいました。怖さを超えたら跳び箱を好きになると思い、私は、「思いっきり助走してジャンプすればできるよ。」とその子にアドバイスしました。けれど、その子はなかなか跳ぶことができません。私は、本当に跳びたいのかな、と誤ってしまいました。しばらくして、私のその考えは間違っていたことに気づきました。私は小さいころからスポーツをする経験が多かったので、やればできるという考えしかもっていなかったのだと思いました。その子は、跳びたくないわけではなく、どうすれば跳べるのかが分からなかったのです。⁴⁾
(健康体育学科 坪川 真央)

前者は、子どもの姿や表情、友達同士の関わり等を丁寧に見取り理解しようとする姿勢が読み取れる。子どものちょっとした様子の変化に気づく感性が育っている。後者は、体育の授業支援を通して、それまでの自分の常識だけで判断するのではなく、子どもの気持ちに気づくこと気持ちを理解した上で、指導方法を考えていく大切さを学んでいる。

次に実際に子どもたちとかわかり、子どもたちの思いや課題に気づき、自分のできることを探っていた二人の文を紹介したい。

始めは、生徒へのアドバイスや叱り方に悩み、自信もありませんでしたが、自分の中で「今の指導方法でいいのか？」という問いを持ち、生徒を信じていくしかないという気持ちになりました。まずは、技術面よりも精神面を鍛えなければならないと思ったので、私自身もメンタルトレーニングの本を読み、他校の卓球部顧問の先生からアドバイスを聞き、生徒と共に努力をしました。すると、生徒達も見て取れるように変わっていき、生徒から「ミーティングを開きたい。」の声が上がるようになってきました。⁵⁾ (初等教育学科 鈴木 智絵)

初めて会った時は、どこか甘えている部分が見られ、個別に学習を行う形が日常のことになっていた。私は、この状態が気になっていて、二人の生徒には、別教室で勉強していることを当たり前と思ってほしくなかったし、かけがえのない時間を教室のみんなと過ごしてほしい、この先、大人になっていく中で仲間をもつことの大切さを教えたいと思っていた。(中略)あと数カ月で卒業となるが、自分自身の経験をもとに、学校の楽しさや何年たっても中学校や高校の仲間は一生続く大切なものであることを伝えたいと思う。そして新たな一歩を踏み出すときの勇気につながるようにと願っている。⁶⁾
(健康体育学科 小堀 航)

前者は子どもとともに自分自身も学ぶ姿勢を大切にしながら、解決策を探り、子どもたちに力をつけていくことができた。後者は、「先生」という立場で接し子どもたちの成長を感じながら、「学生」であるからこそ子どもたちに伝えたいことが見えてきたことについて述べている。両者から、子どもたちの成長を願う姿が伝わってくる。

一人だけを気にかけるのではなく、ほうっておくこともなく、その子を含めてきちんと授業をしようというような空気をいつもつくり出していらっしゃいました。担任の先生と話した時、「大変なこともあるけれど、子どもたち一人一人、いろいろな人に愛され好きになってもらいたい。」と言っていらして、先生は本当にこの子のことや子どもたちみんなのことを考えているのだと感じ、とても感動しました。このクラスの温かい雰囲気を中心にあるのは担任の先生の子どもたちへの思いや情熱なんだと感じ、私はこの先生に出会えたこと、このクラスにかかわれたことは本当によかったと思いました。そして、こんな先生になりたいという大きな目標ができました。⁷⁾(初等教育学科 佐藤 さくら)

上記の文は、先生からの学びを述べている。一人の子どもの支援を行っていたが、状況が変わらない中、先生の姿や言葉から学び、目標をもって進もうという姿勢が見られる。

以上、学生の個別の成長の例を示すことしかできなかったが、子どもたちと出会い、先生方と共に子どもを育てる場に立たせていただく経験を通して成長する学生の姿が浮かんでくる。

3-3 地域連携の視点から

地域と連携した「学び」については、これまでに述べてきたように、教育インターンシップの取り組みを通して深めて来ている。特に教育インターンシップ、教育ボランティアの活動から教育委員会の教員養成の取り組みとつながっていくケースが多く見られるようになった。

また、山内小学校個別支援学級音楽会、陸上部による山内小学校・新石川小学校陸上練習等、教育インターンシップで活動する学生のつながりから要請された取り組みも出てきている。

平成21年度からこれまでに4回行った教育実践総合センター主催の夏季教育講座は、以下の通りである。平成23年度以降学生のスタッフ・参加者も増加し、共に学ぶ場となっている。

年度	フォーラム名・テーマ	講師・担当
21	道徳教育実践研究夏季セミナー 『新学習指導要領のねらいを実現する道徳教育の実践』	谷田増幸（文部科学省教科調査官） 田沼茂紀 教授
22	社会科実践フォーラム 『社会科の授業づくりと評価～今、何が求められているのか？』	澤井陽介（文部科学省教科調査官） 柳下則久（横浜市教育次長）、安野功教授
23	特別活動実践フォーラム 『今、求められる確かな集団活動指導力とは何か？』～ 新しい年間指導計画、指導案モデルや指導法、学校・ 学級経営を追究する研修講座～	杉田洋（文部科学省教科調査官） 城戸茂（文部科学省教科調査官） 新富康央学部長、宮川八岐教授
24	英語活動実践フォーラム 『これから求められる教師像～積極的な受信と発信を 促す指導』	直山木綿子(文部科学省教科調査官) 新富康央学部長、行廣泰三（國學院大 学講師）

4. 考察

社会的な演習・実践等を通した大学と地域社会の連携による「共育」の実践について、教育インターンシップを中心に見てきた。地域の教育関係機関との連携、「共育」における学生の学びは、4年間を通して深まる方向にあると感じている。

4年間の成果と課題について、次に示したい。

まず、1点目としては、「学生自身の活動から生まれた学校との信頼関係」があげられる。

初年度開始時には、学生の活動への期待はほとんどなかったと思われるが、学生の姿勢や活動の実績から、受け入れの希望も多くなり、学生に期待する要望も「学生を育てる」視点で具体的なものを示していただいている。このような信頼関係から、教育インターンシップからの継続の活動を希望する学校が増加し、実際に学生自身も学びの場をいただいている。ただし、健康体育学科の学生の意識づけについては、早い段階からの対応を考えていく必要がある。

2点目として、「先生方、子どもたち、教育関係者からの学びの充実」があげられる。これまでに述べたように、子どもたちや先生方の姿からさまざまな学びの充実が見られる。実際に教育現場の体験を通して自分で動き、感じ、さらにどう行動しこれからをどう進むか、自分で判断する機会をいただいている。また、学生と受け入れ校との関係から、学生の地域小中学校における研究会等の参加や受け入れ校の先生方からの教員採用に向けてのご指導などもいただいている。大学で行う夏季教育講座・研修会等での「共育」の場の設定については、学生や卒業生の参加体制についても考え、さらなる学びの充実をめざしたい。

3点目として、「地域教育関係機関との連携の広がり」と充実」があげられる。前述した1、2点目とも関連するが、教育インターンシップ受け入れ校の広がりや夏季教育講座などの大学開催の研修会への参加校の状況からも、地域教育関係機関との連携の広がりを感じている。それぞれ

の地域の教育委員会の教員養成の取り組み（東京都－教師養成塾、横浜市－AT（アシスタントティーチャー）、アイカレッジ、川崎市－支援員、神奈川県－スクールライフサポーター、ティーチャーズカレッジ、千葉県・市－たまごプロジェクト）との関わりでも、年々学生参加の人数が増加している状況である。今後に向けて地域教育関係機関との連携のさらなる充実が必要とされる。

4点目としては、「入学から卒業までの段階に合わせた大学の組織・体制作り（学生の取組の見通しの明確化）」があげられる。3年間の取り組みから、1年次から4年次までに、どのような流れができてきている。

1年次	ボランティア活動 <運動会、祭、もちつき大会 等>
2年次	教育インターンシップの開始、教育ボランティア活動<教育インターンシップからの継続>
3年次	教育実習の開始、教育ボランティア活動<インターンシップからの継続又は新たな地域へ> 横浜市AT、神奈川県スクールライフサポーター、川崎市支援員 東京都教師養成塾、横浜市アイカレッジ、神奈川県ティーチャーズスクール、千葉たまごプロジェクト
4年次	採用試験、教育ボランティア活動、横浜市AT、神奈川県スクールライフサポーター、川崎市支援員

入学からそれぞれの段階に合わせた大学の組織・体制作りを行うとともに、それぞれの学生の取り組みに見通しをもてるよう指導していく必要がある。

学生の学びの充実を総体として見るのではなく、一人一人を見ていくと、必ずしも学びが充実したとは言えない実態もある。学生一人一人の課題に合わせた対応を考えるとともに、共に考えを伝え学び合う共同体としての人間開発学部学生の学びの充実と連携の視点に力を入れていきたい。

引用

- 1) 人間開発学部ガイドブック
- 2) 教育インターンシップガイドブック
- 3) 教育実践総合センターだより「思ひ草」4号
- 4) 教育実践総合センターだより「思ひ草」3号
- 5) 教育実践総合センターだより「思ひ草」2号
- 6) 教育実践総合センターだより「思ひ草」4号
- 7) 教育実践総合センターだより「思ひ草」9号

（おがさわら ゆうこ・國學院大學人間開発学部教育実践総合センター専門研究員）